



「やさしいまちづくり」を推進

墨田区では、区基本構想の下、「協治(ガバナンス)」の考え方に基づき、区民の皆さん、団体、NPO、企業などによる「やさしいまちづくり」の実現を図るため、体系的に「人づくり」の施策を推進しています。

この「人づくり」施策の基本となるのは、区民の皆さん一人ひとりが自らの行動に責任をもち、他人や地域、さらには環境などに対して、「やさしさ」や「おもいやり」の心をもつことであり、また社会人としてのモラルの保持やマナーの向上、あるいは公德心の向上を図っていくことです。

そこで、平成12年に、「すみだやさしいまち宣言」を行い、広く「人づくり」に関する区民運動を展開しています。

区では、この運動の一環として、「すみだ やさしいまち マナーブック」を配布し、「江戸しぐさ」から、人、地域、環境にやさしい暮らしの知恵を紹介しています。

(詳しくは、区民活動推進課にお問合せください)
街で困っている人を見かけたら、勇気を出して声をかけてみようよ。
さしのべしぐさ



すみだ歩んだ歴史

墨田区の誕生からいまをたどる⑤

昭和20年代

第2次世界大戦が終わり、再建の歩み始めた22年(1947年)3月15日に本所区と向島区は合併し、墨田区が誕生。4月には第1回区長・区議会議員選挙が行われ、勝田菊蔵氏が初代公選区長に当選しました。同年5月3日には日本国憲法および地方自治法が施行され、特別区も市に準ずる機能をもつ地方公共団体となります。

当時の人口はわずかに14万人でしたが、やがて焼け跡にも住宅や工場が建ち、産業のまちとして復興していきました。

また、12年を最後に中止されていた隅田川の川開き花火は、23年9月に第1回全国花火コンクールと合わせて復活しましたが、河川の汚れや交通事情の悪化により、36年に再び中止となりました。

一方、25年12月、都電が初めて水戸街道を走り、向島地区の交通事情は改善され、26年には都内初のトロリーバスが、今井から押上を通り、上野公園に通じ、台東、墨田、江東、江戸川の4区を結びました。同年4月には、第2回区長・区議会議員選挙が行われ、勝田区長

昭和30年代

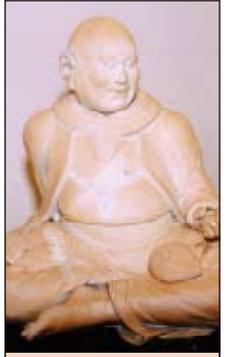
28年には、工場数が戦前を上回り、商業面でも飛躍を遂げ、30年代の高度成長期を迎えます。

32年5月、墨田区制10周年を記念して、墨田区の紋章が公募され、墨田の頭文字の「ス」を3つ組み合わせた図案に決まりました。

さて、34年には墨田区に生まれた王貞治が読売ジャイアンツに入団しました。区立本所中時代、のちに指導を受ける荒川博に野球の素質を見出され、早稲田実業学校高等部に進学し、夏の甲子園で活躍。ジャイアンツ入団後は1本足打法で通算本塁打数868本により「世界のホームラン王」とも呼ばれ、その他数々の記録を保持する大打者となりました。

急激な経済発展のなかで、工場には新技術が導入され、大型店舗やスーパーも進出。道路などの生活環境も急速に整備され、35年には都営地下鉄1号線が開通し、京成電鉄との相互乗り入れとなり、利便性が向上しました。区の人口は、38年に32万6千人となり、ピークを迎えました。

(敬称略)



鳥井京山

(とりい きょうざん)
1815-1884

生 川 墨 焼
の 現 在 田 区
に 後 期 現 在 田 区
を 始 め 了 了 了 了

江戸・東京の焼き物のひとつとして知られる「京山焼き」は、

その名は知られていても残っている作品類が少なく、なかなか目にする事ができず、貴重なものとなっている。

初代鳥井京山は、本名を鳥井重五郎といい、文化12年(1815年)足立郡江北村(現足立区堀之内)の旧家に生れた。16

歳の時、陶製業を学ぶため京都にのぼり、天保10年(1839年)その技術を極め江戸に戻った。

当初は葛飾郡須崎村(現墨田区向島五)に窯を築くが、まもなく少し南の墨堤下の小梅村(現向島一・小梅小学校裏隅田公園内)に移り、鳥井京山と名乗り、「京山焼」あるいは「隅田川焼」として作陶を始めた。嘉永5年(1852年)13代将軍徳川家慶の上覧により、一層名が知られ、以来諸大名・名家の愛顧を受け、とりわけ地元の勝海舟の引立てを受け、維新後も続き、今日でも鳥井家に海舟絵付

の焼物が多く残っている。

京山の作品は抹茶茶碗・花器・水差・鉢・皿・盃など、作家ものとしての芸術品から、実用品に至るまで、陶器・磁器と多彩をきわめている。銘は書き判というか、「京山造」あるいは「京山」、ないしは小判形押印の中に「京山」、桜花印の中に「京山」などが確認されている。

同時に鳥井家は明治5年(1872年)以後煉瓦・耐火煉瓦・装飾煉瓦等の製造を橋場の銭座跡に設けた工場でも行い、明治40年(1907年)には寺島村曳舟川沿いに、鳥井陶器製造所(鳥井工場・現八広一)を建設し移っている。地元では化粧煉瓦を「白煉瓦」といい、鳥井家自体のことも屋号のように「白煉瓦」と呼んでいた。日本銀行・東京駅・帝国図書館などの明治期の建造物に多く用いられ、またマントルピースなども製作しており、現在残っている清泉女子大学校舎のマントルピースと屋根の煉瓦造りの煙突も鳥井工

場の作品だと聞いている。初代京山は明治17年(1884年)に没するが、娘婿の二代京山(鳥井庄右衛門)も工場経営のかたわら茶器類も多く作陶している。当時の向島界限には三浦乾也・浦野乾哉・作根弁次郎等と陶芸家も多く居り、交流

西川寧

(にしかわ やすし)
1902-1989

墨田区に生まれる。初め受章。昭和60年文化勲章。

よ由一に導かれる。西川寧の地蔵(向島育来碑 4-5)

もあったものと思われる。その証しとして、現在、鳥井家にも白井(作根)弁次郎作の、初代鳥井京山の1メートルより少し小さめの、焼物の座像が無傷で残っており、緻密な作品で風貌がおだやかな御隠居様のたたずまいを示す佳品である。

西川寧は書の世界では、「書の巨人」と呼ばれるほどの活動家というか、成果を残した書家という範疇を越えた人であった。書家であり、研究者であり、学者であったといえる。

西川寧は明治35年(1902年)南葛飾郡寺島村(現墨田区東向島3・15・7)に生れた。父も門下二千人ともいわれた西川春洞で、いわゆる春洞流で明治・大正・昭和の書道界に一大勢力を誇った。寺島小学校(現墨田区立第一寺島小学校)から府立三中(現両国高)、慶應義塾大学文学部支那文学科を卒業した。向島百花園から墨堤白鬚神社に向って

進み、現大和湯前の角に邸があった。父春洞は大正4年(1915年)、寧13歳の時に亡くなっている。大学卒業後は慶應義塾大学文学部助手・講師・教授と昭和20年(1945年)4月まで、習字・漢文・中国文学等を教えた。

「私は生まれてから30余年をここで過した。」と記している。昭和13年(1938年)から15年にかけて、外務省在外特別研究員として北京に留学するので、そのころまで向島寺島に住まわれていたのではないかとと思われる。我が家にも祖父が西川春洞氏に書いていたのだい、氏神様の「白鬚大明神」の

軸もあったものである。また向島地蔵坂の子育地蔵尊に、昭和8年(1933年)建立の「子育地蔵尊御由来」碑と「子育地蔵尊御堂建立百年遠忌供養塔」(隷書体)は、西川寧の筆にならるものであり、ぜひ一度ご覧いただきたい。

昭和8年(1933年) 謙慎書道会を創立し、生涯この会の中核として日本の代表的書家団体の一つに発展させた。また昭和23年(1948年)日展に第五科(書)が成立してからは、審査員・評議員・常務理事等に選ばれ、書を日本画・洋画・彫塑・工芸と並ぶ造型芸術の一ジャンルとすべく、毎年出品し組織運営の近代化にも努力した。

書法の臨書・行書・草書・楷書・隷書とさらに篆刻にも、実験・研究をかさね、それぞれで今日の新しい表現形式としてのものを完成させている。また昭和22年(1947年)から37年まで、国立博物館調査員として博物館の書関係の充実を図っている。昭和52年(1977年)には文化功労者を、昭和60年(1985年)には文化勲章を受章している。

平成元年(1989年)5月、87歳で杉並に没した。
(二元墨田区立緑園図書館長 小島惟孝)

すみだゆかりの人々 明治・大正・昭和